



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	非都市部の若年女性の進路選択に関する検討：保育職を事例に
Author(s)	山田, 愛子
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 147, 17-33
Issue Date	2025-12-24
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.147.17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98592
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_1882-1669_147_2.pdf



非都市部の若年女性の進路選択に関する検討

—保育職を事例に—

山 田 愛 子*

【要旨】 本稿の目的は、地方の非都市部で生まれ育ち、地元で保育職に就いた若年女性が進路選択時に受ける制約や活用する資源について明らかにし、非都市部における若年女性の進路選択の実態について分析を深めることである。

高校卒業後の進路を決める段階では、地元で女性向けの職業が限られていることが、女子の選択肢を狭め、制約として働く場合があると確認できた。一方で、町から奨学金を借りて保育職という目標を実現するなど地域の資源を主体的にやりくりする様子が確認できたことに加え、保育職は非都市部で学力やキャリア意識が高い女子が目指す職業である可能性が示唆された。

短大卒業後の進路を決める段階では、都市部の就職先を詳しく知る機会が限られているという制約を受けていた一方で、地元で実家による経済的・精神的サポート、職場の円滑な人間関係、個々の子どもに目が届く保育環境を資源として見なし、地元を主体的に選択する姿が確認できた。

【キーワード】 地方の若者、進路選択、若年女性、保育職、教育機会の地域間格差

1. はじめに

1.1. 問題の所在

本稿の目的は、地方の非都市部（以下、非都市部）で生まれ育った若年女性の進路選択時の経験を読み解くことを通じて、彼女たちがどのような制約を受け、何を資源として活用してきたのかを明らかにし、非都市部における若年女性の進路選択の実態について分析を深めることである。

高等教育機会の地域間格差は未だに顕在化しており、大学進学希望の有無が世帯年収に左右される傾向は、大都市圏よりも地方で強く、大都市圏ならば進学しているはずの成績でも地方では進学しないケースが生じていることが指摘されている（朴澤，2024：225）。地方の高等教育のアクセス可能性、つまり自宅通学の選択はかなり限定されていること（小林，2009：159）を踏まえると、地方の中でも非都市部のように高等教育機関が立地していない地域から進学するには、家庭への教育費負担が深刻であるため、若者が進路選択時に制約を受ける傾向が強いと思われる。

これまでの先行研究では、非都市部の若者の進路選択の実態を詳細に明らかにするために、当事者である若者の視点が注目されてきた。吉川は、島根県郡部の高校卒業生を対象にライフヒストリーの聞き取り調査を行い、地方における県内周流のローカル・トラックは、両親の学歴観や子どもの職業への期待、初等教育、県内労働市場の開かれ方など地方の社会・文化全般に関わる大きな流れであると指摘し、若者の進路が地域によって水路付けされていることを明らかにした（吉川，2001：224）。加えて、山田は、非都市部の学校現場に着目して若

* 北海道大学大学院教育学研究院博士後期課程 教育社会論講座（教育社会学）

者の進路選択時の経験を描いたことで、地域的条件が制約として働いて若者の選択肢を狭める場合と、むしろ資源として進路実現に活かされる場合があると明らかにした（山田，2025：31-34）。これらの研究では、非都市部の若者の進路選択時の経験について当事者の視点から分析を深めたことで、彼らが独自の価値基準をもとに進路を選択していることが明らかにされている。

だが、上記の先行研究では、非都市部で若者本人の性別がどのように進路選択時の経験や進路意識に影響したのかということは明らかにされていない。

若者の進路選択を議論する上で、性別は注目すべき重要な要因の一つである。上山は、北海道の高校生に着目した量的分析を行い、男性は所得階層が高いほど進学を自明として進学先地域の制約が少ない状況にあるが、女性ほど所得階層に限らず自宅通学を希望する傾向が強いことを指摘した（上山，2024：209）。このことから、地方の女性は地元志向が強いことがうかがえ、おそらく男性とは異なる価値基準をもとに進路を選択している場合があると考えられる。

地方では、家族の中でケア負担が女性に偏る傾向があり、性別役割分業意識が未だに根強い（土田，2009：247）。そのような状況のもとでは、女性が進路選択時に受ける独自の制約があると推察される。特に、非都市部のように高等教育機関に進学するためには地元を出る必要がある地域では、女性が受ける制約はさらに顕著であるのではないか。例えば、女性に対して、地元を出てまで高い学歴を得ることよりも、地元に残ってケア役割を担うことが期待され、その結果として女性の進路選択肢が狭められてしまう場合が想定される。

以上を踏まえると、非都市部の若者の進路選択について理解を深めるためには、本人の性別によって、進路選択時に受ける制約の内容や、有している資源に差異があることに着目すべきであると考えられる。そこで、本稿では、非都市部において特に制約を受けやすいと思われる若年女性に着目し、地域的条件が彼女たちの進路選択に与える影響について分析を深めたい。

1.2. 先行研究の整理

女性の地元志向が強まる背景について、石川は、地方の母親を対象としたインタビューを通して、女子には老後のケアについての期待があり、母娘の互助的関係を続けていくために女子を地元に残す戦略がおそらく無意識のレベルでとられていることが影響していると指摘した（石川，2011：79）。杉原によると、娘への愛着期待は、娘への教育的働きかけに影響を与え、結果的に娘の地元志向につながる場合があるという（杉原，2011：182）。これらのことから、地方では女性に対するケア役割への期待が強いために、若年女性が進路選択時に制約を受けていると考えられる。特に、非都市部では高等教育機関が立地せず、就業先も限られているため、若年女性が家族からケア役割を期待されて地元で就職することを前提に進路を選ぶ場合、選択肢がかなり少ないことが想定されるためである。

だが、上記の先行研究では、地方の女性が受けている制約が中心に議論される傾向にあり、彼女たちがどのような場面で主体性を発揮しているのかということが明らかにされていない。

杉田は、東京の若年女性のライフヒストリーを聞き取り、彼女たちは不安定化した雇用を経験しながらも、生活費を稼ぐことを優先するだけでなく、自分自身を肯定できる生き方を求めており、そのことが経済的合理性以上に優先される場合があると指摘した（杉田，

2015：219)。加えて、相対的に安定した大人たちによるコミュニティとは異なる位相で、彼女たちが高校時代の友人関係などのネットワークを支えに、自分たちの生活世界を立ち上げようとしていたことを明らかにした（杉田，2015：225）。上記の研究は、大都市の研究ではあるが、若年女性が自身の生活や職業移行の経験を意味づけている様子や、不安定な雇用や生活基盤などの困難に直面しながらも社会関係を資源化して、主体的に生活を成り立たせようとする様子を描いている。

杉田（2015）の研究を踏まえると、おそらく非都市部で生活している若年女性においても主体的に自らの生活世界を立ち上げ、制約を乗り越えようと試みてきた面があるのではないかと考えられる。非都市部の若年女性の実態を正しく理解するためには、彼女たちを制約を受けて地元志向を受容せざるを得ない存在として捉えるのみではなく、主体的に資源をやりくりしている側面があることにも着目することが重要であるといえよう。つまり、地元志向の進路を選んだ若年女性が自身の進路をどのように意味づけているのかということを明らかにする必要がある。

非都市部のように良好な雇用機会が少ない地域では、女性を中心として非正規雇用であるとしても公共部門に職を求める者が多い（阿部，2017：107）。特に、公務以外の公共セクターとして代表的な医療・介護・保育の職場は、労働時間や賃金など改善すべき部分はあるが、資格の取得や役職といった客観的な目標の達成が正規雇用への転換や労働条件の向上と結びつきやすく、キャリア形成という点では高く評価されている（中澤，2017：165）。これらのことより、非都市部のように安定した職業が限られている地域では、公共部門の中でも資格職に就くことは女性が地元で堅実に働くことができる選択肢として見なされていると推察される。おそらく地元で女性向けの安定した職業が限られていることによって、女性が公共部門の資格職という進路に水路付けられる可能性が高いと考えられる。

女性にとって保育・介護の職場での就業は、長時間労働を受け入れさえすれば大学卒と同じ資格をより少ない教育投資で取得でき、同一資格を取得すれば、性や学歴に関わらず評価を得られるため、教育投資の効果が高い進路である（岩脇，2025：23）。なおかつ、保育職など専門資格を要する職種に就くことは、出産や子育ての時期に柔軟に対応できることを意味するため、女性が資格を用いて子育てをしながら働き続けるという見通しが持てる（上地・都島，2025：206）。これらのことを踏まえると、女性はケア役割とキャリアの両立を考え、資格職を選ぶ傾向が強いと考えられる。おそらくケア役割や性別役割分業のようにジェンダー規範を意識した女性が、資格職を志向する可能性もある。

以上を踏まえ、非都市部の公共部門の中でも医療・介護・保育といった資格職を選んだ若年女性を焦点化することで、地域的条件やジェンダーが若者の進路選択にどのように関わるのか検討を深めたい。

1.3. 調査概要

本稿では、地方県の人口1万人弱の町（以下、A町）で保育職に従事している20代前半の若年女性3名を対象に、半構造化インタビュー¹を行った際の結果をデータとして用いる（表1を参照）。主な聞き取りの内容は、①基本情報（年齢、学校歴、居住歴など）、②保育職を志望するまでの経緯、③地元でUターン就職をするまでの経緯、④自身の進路を振り返って感じること、⑤将来展望である。協力者の募集は、A町で全校生徒100名程度である町内唯一の高校

(以下、B高校) から紹介を得て、機縁法を用いて行った。

いずれの協力者もA町出身であり、幼少期から高校までA町で生活している。A町には高等教育機関が立地していないため、大学や短大・専門学校への進学を考える場合は、地元を出て自宅外通学をする必要がある。そのため、いずれの協力者も高校卒業と同時に地元を出て都市部の短大に進学しているが、新卒で地元の保育施設にUターン就職をしている。協力者の全員が、短大で保育士免許と幼稚園教諭二種免許の両方を取得している。

なお、本稿においては、協力者の個人情報保護の観点から、各協力者の年齢の詳細は明示せず、学校名や地名など固有名詞は全てアルファベット等を用いて表記し、個人が特定されるような情報は必要に応じて改変している。

例年、B高校から専門資格を要する職業を目指す女子生徒は、看護系か保育系を志望する傾向が強い。A町には単科やクリニック等の小規模病院が数か所程度しか立地していないことに加え、労働条件が厳しいため、B高校から看護師を目指す若年女性は町外で就職する傾向がある。その一方、保育職を目指す若年女性は、短大・専門学校を卒業後、自分の町に戻って地元の保育施設で就職する傾向がみられることから、A町の女性にとって保育職は地元の資格職の典型であると考えられる。

表1：協力者一覧表

	職業	雇用形態	進路
X	保育士	正規	高校卒業→短大進学→保育施設就職
Y	保育士	正規	高校卒業→短大進学→保育施設就職
Z	幼稚園教諭	正規	高校卒業→短大進学→保育施設就職

1.4. 分析枠組

先行研究では、地域的条件が若者の進路選択に与える影響を明らかにするために、地域的条件が制約として働く場合、および進路実現のための資源として活かされる場合に着目して、「制約」と「資源化」を分析枠組として用いたことで、非都市部で生まれ育った若者の進路選択時の経験について分析を深めることが可能となった(山田, 2025: 31-34)。そこで、本稿では、地域的条件が若年女性の進路選択にどのように関わるのか検討を深めることを目的に、「制約」と「資源化」を分析枠組として設定する(表2参照)。本分析枠組を用いることで、非都市部の若年女性の進路選択時の経験を詳細に描くを試みる。

具体的に、進路選択の第一段階として、高校卒業後の進路を選ぶ段階に着目し、協力者が短大の保育系学科に進学することを決めるまでに受けた制約と活用した資源を明らかにする。続いて、進路選択の第二段階として、短大卒業後の進路選択に着目し、協力者が地元の保育施設を就職先として選ぶまでにどのような制約を受け、何を資源として活用したのかを明らかにする。

表2：分析枠組

	制約	資源化
高校卒業後の進路を決める経緯	進学先を決める際に受けた制約	進学先を決める際に活用した資源
短大卒業後の進路を決める経緯	就職先を決める際に受けた制約	就職先を決める際に活用した資源

2. 高校卒業後の進路を決める経緯

2.1. 制約

協力者の語りからは、非都市部では若年女性にとって職業のロールモデルが限られているのではないかと感じられる場合がみられた。Xさんは、高校当時から地元志向が強く、地元で保育職に就くことを目指してきた。保育職を志望した背景には、中学から高校にかけて特になりたい職業が見つからず、むしろ姉の職業である保育職以外で、将来の具体的な職業のイメージがつかなかったことが関係していた。

「中学・高校の総合学習（注：調べ学習）で、将来になりたい職業を調べる時に、姉が地元で保育職だったので、自分も子どもが好きだし、ちょっと保育士のことを調べようかなみたいな気持ちで調べて、保育士を目指すようになった感じです。特に、保育士になりたいという強い意志とかはなかったですね。きょうだいから進路とかのアドバイスを受けたことは特にないですが、（地元で保育職に就いている）姉から保育士の仕事が大変ってことだけは聞いていました（Xさん）」

Xさんは当初、保育系学科がある専門学校への進学を予定し、複数の専門学校のオープンキャンパスに参加していたところ、高校3年次の担任から短大を勧められ、推薦入試で短大の方を受けることに決めた。短大進学については、「田舎だと都会の学校より学力が低い感じがするので学力面でついていけるのかなという不安」に加え、「地元を離れる、親から離れる不安」があったと振り返る。

ここで注目したいことは、姉の職業である保育職以外で地元で働くイメージがつかなかったということである。先行研究では、非都市部では親やきょうだい、親族の職業がロールモデルとなり、子どもの進路選択に決定的な影響を与える場合があると指摘されている〔吉川, 2001: 136〕。Xさんは、都市部で就職した兄よりも、地元で働く姉の進路の方を身近に感じていたと語っていたことから、同性である姉の進路の方が自身の将来の姿としてイメージしやすかったのではないかと推察される。つまり、地元で保育職に就いている姉が、きょうだいという身近な存在であることに加え、同性であったためにXさんの進路のロールモデルになった可能性が高い。

2.2. 資源化

2.2.1. 子どもと関わる仕事

非都市部の若年女性にとって、保育職は身近な職業として認識される傾向がみられた。Y

さんは、「幼稚園に通っていた時にすごく好きだった先生」の影響で保育職に関心を持ち始めたが、自身も「親戚の子が家に遊びに来た時に可愛いと思う」など「昔から小さい子と関わるのが好き」だったため、自然と子どもと関わる仕事を目指すようになった。

「高校生の時にはもう保育の道でしたね。小さいころからなりたいて思っていました。子どもと関わる仕事というと色々あると思うんですけど、私にとっては幼稚園・保育士両方というイメージだったので（Yさん）」

Yさんは、高校当時に、母が介護関係の仕事に従事していた影響で、「介護の道だとか社会福祉士とか、人と関わる仕事」にも興味が出て、保育士になりたいという「軸がぶれた」ことが一度ある。しかし、「やっぱり子どもが好き」であり、小さい子どもと関わるのが得意であるという適性を活かせるような職業に就きたいという気持ちが強かったため、高校卒業後は保育系学科がある短大・専門学校に進学し、「保育の道」を目指すことに決めたという。

そこで、進学先について担任の先生に相談したところ短大の推薦入試を紹介され、自治体から奨学金を借りて短大に進学することに決めた。その際、奨学金の条件として、短大卒業後は地元の保育施設で働くことが決まっていたため、高校の時点から就職時には地元に戻ることを念頭に置いていたという。進学に伴い地元を出ることについて「人見知りの性格があるので短大で友だちでできるか不安だったり」、「一人暮らしのことへの心配」や、短大の勉強についていくことができるかという不安が強かったが、短大に進学することについて保護者から期待や応援を受け、次第に不安よりも短大で学べることへの期待が高まり、地元を出て進学することを前向きに捉えるようになっていった。

まとめると、Yさんが幼稚園時代の先生との関わりや、親戚の子どもの面倒をみた経験を資源化し、子どもと関わるのが得意だという適性を見つけ、保育職を最も身近な職業として認識していったことが分かる。

2.2.2.子どもの教育に携わる職業への憧れ

Zさんは、子どもの教育に携わりたいという思いから、教育関係の職業であるという点で幼稚園教諭に関心を持ち始めた。子どもの頃は、友人と遊びで「幼稚園ごっこ」をして「いつも自分が先生役をしていた」というほど幼少期から「先生という職」への憧れは強かったと語る。実際に、小学校の先生も視野に入れていたが、幼稚園の先生の方がより自分に向いていると判断したという。

「それこそ私が幼稚園児の頃から幼稚園の先生になりたいとずっと思っていて、夢は一度も変わりませんでした。先生という職に興味があって、小学校の先生ともちょっと迷ったんですけど、とても優しくった幼稚園の先生が存在だとか、保育園・幼稚園の職場体験に中学校・高校の授業の一貫で行った時に、やっぱりちっちゃい子の方が教えたいとか色々思いましたね。小学生とは、地元の少年団のコーチなどといった形で関わるができるので、幼稚園の先生に進みました（Zさん）」

Zさんは、子どもたちに多くのことを伝え、学びの幅を広げることができるような幼稚園教諭を目指していた。そこで、高校当時は、学内で高い成績を維持する一方、スポーツに専念したり、英語の勉強のために海外への長期留学に挑戦するなど、まずは自身が学びの幅を広げ、様々な経験を積むことで、幼稚園教諭として子どもを教育するために必要なスキルを高めようと励んできた。

進学先を決めるにあたっては、専門学校か短大か迷ったが、保護者と複数校のオープンキャンパスに参加し、先生や学校の雰囲気、ピアノの数など教育設備、入試形態を総合的に考慮し、最終的に自分に合っていると感じた短大の推薦を受けることに決めた。

先行研究では、「子どもがかわいい」ことへの実感が、女性保育士にとって保育者としての「やりがい」に大きく影響していると指摘されてきた（上地・都島，2025：202）。しかし、Zさんの語りでは、幼稚園教諭が初期教育に携わる職であることが強く意識されていたことから、「子どもがかわいい」ことを実感できる場所よりむしろ子どもの教育に携わる職であるところに保育職の価値を見出しているのではないかと推察される。

まとめると、Zさんにとって「幼稚園時代の先生」は、教育に携わる職業への関心を深めるきっかけを与えたキャリアのロールモデルとして見なされていたことが分かる。

3. 短大卒業後の進路を決める経緯

3.1. 制約

Zさんは、「高校当時は地元で就職するとか全く考えていなくて」、むしろ短大が都市部に立地しているため、「都市部でそのまま就職しようかな」と都市部の保育施設への就職も積極的に考えていた。もともと短大進学を機に都会に進出することについては、「田舎育ちだったので都会に行くことが嬉しくてワクワクした気持ちが大きかった」と振り返る。

短大に入学した当初は、保育職のための勉強や実習が厳しく、「勉強に追われる」日々が続いたことに加え、都市部出身の学生が過半数を占め、同郷出身の学生は一人もいない状況で多少なり緊張感はあったが、「幼稚園教諭という同じ目標に向かって頑張っていること」で同級生と共通の話題ができ、自然に「仲良くなって人間関係の幅が広がっていった」と語る。このことから、友人関係にも恵まれ、都市部への定着が順調であった様子がうかがえる。

だが、就職活動の時期になると都市部の幼稚園に就職することへの不安が強まっていったという。

「うちの短大が、幼稚園実習は全て地元に戻ってくる実習だったので、都会の園とかが全く分からなかったのも、ちょっと不安もあったんですね。地元の幼稚園は内容とか先生も分かっていたんですけど、都会の園には本当に（実習で）数回しか行かなかったのも（Zさん）」

保育や幼児教育では、法人ごとに子どもの関わり方（保育観）や子どもに対する見方（子ども観）が多様であり、その中で実践が行われているため、自身に「合う」保育園や幼稚園を選択するためには、直接的な経験が重要となる（都島・上地・片山，2025：90-91）。このことから、保育系学科の学生が就職先を決めるにあたって、実習の経験が重要であることが分かる。Zさんの場合、短大の実習の方針で地元の保育施設における実習が中心となり、都市部

の幼稚園の「内容」をみる機会が限られていたという制約を受けたことで、地元志向が次第に強まっていったことがうかがえる。

3.2. 資源化

3.2.1. 経済的・精神的な支えとしての「実家」

Xさんは、地元に戻って就職した理由として、環境的に地元の方が住みやすいと感じていたことに加え、都会で生活が続けるとなると経済的コストが大きいために地元に戻る必要があったと話した。

「もともと地元には帰ってこようと思っていて、都会のように人が多いところは苦手なので、人が少ない方が好きなので、短大の時点から地元に戻ろうと思っていました。とりあえず実家に帰ってこようと思って、きっと社会人一年目だと不安もすごいだろうし、お金の面も大変になってくるだろうと思ったので実家暮らしの方がいいかなと。今も実家暮らしを続けています(Xさん)」

短大当時に幼稚園実習に行った際には、保育士の業務量が多く、働き方が想像していた以上に厳しかったため、他の職業への就職を考えた時期があった。だが、保護者から、地域の町で保育士を募集しているという情報提供と「まずは地元の保育士を受けてみてから考えなさい」という助言があった。そこで、受けたところ合格し、地元に戻りたいという気持ちが強かったため、「保育士としてやっていけるのか」という不安はあったが地元の保育施設に就職することに決めたという。

現在、進路を振り返り、子どもは好きであるが事務仕事など業務量が多いために保育士を続けていくことが体力的に厳しいと感じることや、子どもたちをまとめることが想像していたよりも難しく、自分は保育士に向いていたのだろうかと思悩むことも時々あると語る。

Xさんの語りで注目したい点は、「実家暮らし」への意味づけである。宮本によると、親との共同生活が地方の若者を経済的に補完する重要な機能を果たしていると指摘されている(宮本, 2017: 63)。Xさんにとっての「実家」は、社会人生活への不安を和らげる役割を果たしていたことに加え、経済的な生活基盤を支える役割を果たしていたことがうかがえる。つまり、都市部に住み続け、住居費や食費を全て自分で負担しながら生活するよりも、地元の「実家」に戻り、保護者から経済的なサポートを受けながら社会人生活を送る方が合理的な選択肢であったことがうかがえる。なおかつ、Xさんが短大当時から、保育士の労働条件の厳しさに不安を覚えていたことを踏まえると、地元の実家から得られる経済的・精神的サポートは、社会人生活の支えであったことが分かる。まとめると、資源としての「実家」は若年女性を地元に戻す誘因であると考えられる。

3.2.2. クラスの人数規模が小さい保育現場

Yさんは、短大進学時に借りた奨学金の条件で、卒業後は地元で働くことが義務づけられていたため、もともと就職を機に地元に戻ることは決まっていたが、地元の保育施設で働く選択は主体的なものであったと解釈している。具体的に、地元の「人数が少ないから一人ひとりの子どもをみれる」という保育環境の方が、子どもたちにより質の高い保育を届けるこ

とができ、自分もやりがいを感じることができるのではないかと思います、地元に戻ることに決めたと言った。

「〇〇市（注：都市部の地名）の実習もあったんですけど、人数が多くてなかなか一人ひとりと向き合えないと思ったので、地元の町は人数が少ない分、個々に目が届くかなと思いました。短大の時に幼稚園実習で〇〇幼稚園（注：地元の幼稚園）に行って、地元で就職を考えているんですってことを話したら、（実習先から）就職の紹介があり、今の職場に決まりました。実習先の幼稚園は自分で選ぶ感じですね（Yさん）」

現在、自身の進路を振り返り、「子ども一人ひとりへの声掛けや援助の仕方が違う」ため、「子どもに合った援助や対応を日々探すのがすごく大変」ではあるが、「やりがい」もあるため、将来的にも保育職を続けていきたいという。

先行研究では、保育士女性は、生活基盤の安定した地元で生活をしながら、地元の園で働き続けることの延長線上に理想の保育者の実現を考えているようであり、特定の場所に準拠した像というよりは保育士として子どもとの関わり方に重きを置いている傾向があると指摘されている（上地、2025：164）。Yさんの語りにおいても、就職先の保育施設を選ぶにあたり、どの保育施設が自身の保育観に合っているかということが重要視されていた。個々の子どもと丁寧に関わることを理想とするYさんにとって、「人数が少ないから一人ひとりの子どもをみれる」地元の保育施設の方が、自分の保育観と合致していて、やりがいを感じることができるといふ点では資源であり、魅力的な選択肢であったことがうかがえる。

3.2.3. 豊かな地元つながり

Zさんは、前述の通り（3.1.）、都市部の就職先の実態について知る機会が限られていたという制約を受けていたところ、地元で幼稚園の先生として働いている「幼馴染」から受けた連絡を機に地元の幼稚園で就職することに決めたと言った。

「実際、地元の幼稚園実習に行ったりとか、その後のことを考えてやっぱり地元に戻ってこようかなとか、地元の少年団のコーチも続けていきたいしと考えて帰ってきましたね。この園に就職したのは、幼馴染から空きがあるから来てほしいと言われて、（短大の）周りの友だちも就職が決まっていたのでじゃあ行こうかなという本当に軽い気持ちからで、地元にも友だちもいるので地元に戻ってもいいかなって。地元の方が内容とか先生も分かっていたので、この園の幼稚園の先生には知り合いがすごく多かったので、働くなら地元の方が安心かなと思っていました（Zさん）」

非都市部の若者が、家族や知人など「地元つながり」を通じた就職を志向することは注目されてきた（尾川、2012：63）。むしろ社会関係の利用によって、相対的に安定した就業の機会を若者が獲得していることも確認されている（石黒、2018：43）。Zさんの語りにおいても、地元の「幼馴染」の存在が、地元就職の決め手となる情報を提供していることから、地元における社会関係が就職に関する情報ネットワークとして資源化されていることがうかがえる。

Zさんは現在、自身の進路を振り返って、地元では職場に「知り合い」が多いことで安心感

があり、「職場の人は良い人たちばかりでとても仕事をやりやすい」と、地元で就職したことを積極的に意味づけている。幼稚園教諭という職業を選んだことについても、「子どもたちを教えるとすごく成長しているところにやりがいを感じている」と肯定的に評価していた。

そこで、最近では、「より多くのことを子どもたちに教えていきたい」という思いから、幼稚園教諭一種免許の取得に挑戦することに決め、現在は仕事と両立しながらも「通信で幼稚園の一種免許をとるために勉強中」とあるという。おそらく職場に「知り合い」が多いという地元ならではの豊かな人間関係を積極的に活かすことで、キャリアに集中した生活を送ることができることを見据えて、地元を選択したのではないかと推察される。

4. 考察

4.1. 保育職という進路について

本節では、協力者が高校卒業後の進路を決めるまでに受けた制約および活用した資源に着目することで、非都市部の若年女性が保育職という進路をどのように解釈しているのかを検討したい。

第一に、非都市部では、地元志向が強い若年女性にとって保育職に就くことは、地元で女性が確実に安定した職を得るための手段として見なされていることが明らかになった。その背景には、非都市部では女性の職業が限られていることが制約として働いている様子がうかがえた。具体的にXさんの語りでは、高校当時から就職先は地元と決めていたが、姉の職業である保育職以外で地元の職業のイメージがつかなかったという状況が確認できた(2.1.)。

地方の若者にとって、公務以外の公共セクターとして代表的な医療・介護・保育の職場は、労働時間や賃金など改善すべき部分はあるが、資格の取得や役職といった客観的な目標の達成が正規雇用への転換や労働条件の向上と結びつきやすく、キャリア形成という点では高く評価されている(中澤, 2017: 165)。このことから、一般的に地方の若者は、安定した雇用であるという点で資格職を高く評価していることがうかがえる。

しかし、地元志向が強い若年女性にとって、保育職のような資格職は、安定した職業であるという点でメリットがあるのみではなく、女性の職場が限られている地元でも確実に働くことができ、地元に残る選択肢をつくるという点で評価されていると推測できる。非都市部では女性向けの安定した職業が限られているために、若年女性が地元に残ることを希望する場合は職業選択肢がかなり狭められる。つまり、地元に残ることを最優先にするのであれば、職業選択肢が少ない中から進路を選ばざるを得ないという点で、若年女性は制約を受ける傾向が強いと考えられる。

第二に、非都市部の若年女性にとって、子どもと関わる仕事を目指す場合に、学校教師よりも保育職の方が親和性が高いことが明らかになった。具体的に、Yさんの語りでは、昔から小さい子どもに接することが得意であったことを根拠に、自分は子どもと関わる仕事に向いていると判断し、卒業後は地元の保育施設で働くという条件付きの奨学金を町から借りて短大に進学し、保育職という進路を実現していた(2.2.1.)。

先行研究では、育児や介護など「人の世話は女性に向いている」というジェンダー観は、地方で強い支持をされていること(石川, 2011: 66)を踏まえると、Yさんが子どものケアに向いていると感じた背景には、地方のジェンダー観から無意識的に受けていた影響があるの

ではないかと推測できる。

また、本稿において、Yさんが短大に進学するために町から奨学金を借りたことや、Xさんが都会で生活するには経済的コストが大きいために地元に戻る選択をしたように、経済的理由が語られていたことを踏まえると、協力者たちは進路選択時に多少なり経済的制約を受けていたのではないかと推察される。つまり、家庭の経済力に加え、自分の学力や適性、地元の雇用機会といった現状を総合的に考慮して、資源をやりくりして実現できる範囲内で進路を選ぶとなると、学校教師に比べ、保育職の方がより現実的な選択肢であったのではないかと考えられる。

加えて、A町の場合、保育士・幼稚園教諭は地元出身者が大半を占めるため、自分と同郷であることで身近な進路のロールモデルとして感じやすいとも想定できる。おそらく非都市部の若年女性にとって保育職は、子どもと関わる仕事の中でも、自分が有する資源を総動員して最も実現しやすい職業であるのではないだろうか。

第三に、非都市部で教育関係の職種を志望する若年女性は、保育職をイメージしやすいことが明らかになった。具体的に、Zさんは小学校教師か幼稚園教諭で悩んだが、より小さい子どもを教えたいという思いから、幼稚園教諭を目指したと語った。そこで、子どもの教育に携わるためには、まず自身が学びの幅を広げる必要があると思い、学生時代から留学など経験を積み、できる限りスキルを磨いてきたということが確認できた(2.2.2.)。

若年女性にとって、保育職など専門資格を要する職種に就くことで、資格を用いて子育てをしながら働き続けるという見通しが持てるため、「復職のしやすさ」がメリットであると見なされてきたという(上地・都島, 2025: 206)。しかし、Zさんは、どの地域であっても柔軟に働くことができ、復職も可能であるという一般的な資格職のメリットに魅力を感じて、保育職を選んでいるのみではなかった。むしろ、子どもの教育に携わりたいという思いから、学校教師や幼稚園教諭など教育関係の職業を全て含めて考えた時に、より小さい子どもに教える方が自分に向いていると判断して幼稚園教諭を選んでいった。

Zさんが、子どもたちの学びの幅を広げることができるように、学生時代からスキルを磨いてきたことを踏まえると、幼稚園教諭になるためにはある程度高いスキルが必要であると認識していたことがうかがえる。このことは、非都市部では幼稚園教諭が、学力やキャリア意識が比較的高い女子生徒によって目指されている場合がある可能性を示唆しているかもしれない。

4.2. 就職を機に地元に戻るという進路について

本節では、協力者が短大卒業後の進路を決めるにあたり、どのような制約を受け、何を資源として見なしていたのかを読み解くことを通じて、就職を機に地元に戻るという進路が彼女たちによってどのように解釈されているのかを検討したい。

第一に、非都市部出身であることで、都市部での就職先に関する情報収集にあたって制約を受けやすく、結果として地元に戻る選択につながる場合があると明らかになった。Zさんの語りでは、都市部で幼稚園教諭として働くことも視野に入れていたが、短大の実習は全て出身の保育施設で行うことが義務づけられていたため、都市部の保育施設の実態が全く分からず不安があり、地元志向が強まっていったことが確認できた(3.1.)。おそらく、その背景には都市部と非都市部では就職先に関する情報の集め方や、利用する情報源が異なることが

関係していると推察される。

尾川は、非都市部の若者が、家族や知人など「地元つながり」を通じた就職を志向することを指摘した（尾川，2012：63）。Zさんが実態の分からない都市部の保育施設で働くことには不安があったという語りを踏まえると、非都市部の若者たちが「地元つながり」を通じた就職を志向する背景には、知人などが既に働いている職場を選ぶ方が、事前に働き方や人間関係など就職先の実態を把握しやすい分、自身のイメージと就職先の現実の不一致を防ぐことができるという点で、よりリスクが低い選択だと認識されているのではないかと推察される。実際にZさんも地元の幼馴染を通じて就職先を見つけたことを踏まえると、地元つながりを通じた就職を志向する非都市部の若者にとって、都市部の就職活動は、開始する時期や利用する情報源などイメージがつきにくいこともあるのではないだろうか。

特に、保育系の学生は実習での経験を通じて施設の雰囲気や理念を把握し、応募先を決める傾向が強いため、実習の経験は就職先を決める際に重要な情報源であること（都島・上地・片山，2025：89）を踏まえると、保育職を目指す者は、就職先の詳細を知ることが重視していることがうかがえる。都市部出身の学生であれば、幼少期に通っていた分、ある程度は都市部の保育施設のイメージがつくと思われるが、おそらく非都市部出身の学生にとって、都市部の保育施設は人数規模の大きさから想像がつきにくく、実習で経験する機会がなければ不安であり、就職先の選択肢から外してしまうことは想像に難くない。

一方で、彼女たちが、就職を機に地元に戻るという進路を積極的に意味づけ、地元の資源を有効に活かしていることが明らかになった。Xさんの語りでは、環境的に地元の方が住みやすいと感じていたことに加え、都会で生活が続けるとなると経済的コストが大きいため、実家による経済面の支えが不可欠であると考え、地元に戻る判断をしたことが確認できた（3.2.1.）。

非都市部では、進学のためにやむをえず地元を離れざるをえなかったが、もともと地元から離れるという意味が強かったわけでもないのに、卒業後に地元に戻る選択をする若者が一定数みられる（轡田，2017：223）。北海道を事例とした量的分析によると、男性は所得階層が高いほど進学を自明として進学先地域の制約が少ない状況にあるが、女性ほど所得階層に限らず自宅通学を希望する傾向があり（上山，2024：209）、女性は男性に比べて地元志向が強いことが指摘されてきた。非都市部において、実家から受ける経済的・精神的サポートを重視し、進学を機に地元を離れたとしても卒業後に地元に戻って就職をするという選択は、女性に多い傾向であるのかもしれないと示唆できる。

第二に、地元の職場の方が理想に合っていて、やりがいを感じることができるという思いから、地元に戻って保育職に就くという選択に結びつく場合があることが明らかになった。具体的に、Yさんは保育士として、人数規模が小さいクラスのもとで個々の子どもに時間をかけて向き合いたいというキャリア観があったため、地元に戻ったことは主体的な選択だと意味づけていた（3.2.2.）。Yさんは、町から奨学金を借りて短大に進学したため、地元で就職することが義務付けられていたことから、一見、奨学金の条件による制約を受けているようにも見受けられる。

しかし、Yさんは、奨学金の条件によって地元就職を受け入れざるをえなかったのではなく、自らが理想とする「個々の子どもに目が届く」保育現場として主体的に地元を選んだと解釈していた。このことから、非都市部の若年女性の進路選択の実態を明らかにするためには、

地元志向の進路を選んでいる者であっても、主体性を発揮して地元を選んでいる場合があるということに留意すべきだといえる。つまり、地元志向が強い若年女性を、制約を受けた結果として地元に残っていると解釈するのではなく、当事者が地元の資源に魅力を感じ、地元でキャリアを築くことを主体的に選ぶ場合があることにも注目することで初めて、若年女性の進路選択について理解を深めることができるのではないかと考えられる。

最後に、地元の友人関係が、就職に関する情報源として活用され、地元のように職場に友人・知人が多い環境の方が安心して働きやすい環境であると見なされていることが、地元に戻る選択に結びついていることが明らかになった。Zさんの語りでは、地元の保育施設で働いている幼馴染から受けた連絡をきっかけに、職場に知り合いが多い方が安心できると思い、地元に戻って働くことに決めたという(3.2.3.)。

他の保育施設に転職した経験を持つ女性保育士は、前の保育施設を辞めた理由として企業規模や給与よりも職場の人間関係を挙げる割合が高いと指摘されている(上地・都島, 2025: 181)。特に、保育の職場では労働条件が厳しいため、円滑な人間関係は安定したキャリア形成のために重要であると考えられる。つまり、Zさんは、職場に友人や知り合いが多いという地元の特徴を資源として見なし、都市部で就職するよりも地元に戻って就職した方が人間関係が良好である分、仕事に集中することができ、幼稚園教諭として着実にキャリアを積むことができると判断したことが分かる。実際に、Zさんは現在、仕事と両立しながらも通信で幼稚園教諭免許一種取得のための勉強に取り組み、キャリア形成に集中していた。一般的に、キャリア意識が高い層ほど都市部に進出すると見なされがちであるが、地元で人間関係が円滑な職場環境を資源化し、地元を拠点にして挑戦するというキャリアの積み方をする若年女性の存在にも目を向ける必要があると思われる。

5. おわりに

本稿の意義は、非都市部で生まれ育ち、地元で保育職に就いた若年女性を焦点化したことで、当事者は非都市部における女性の選択肢の少なさを必ずしも不利として捉えてはおらず、保育職に就くことおよび地元で就職することを肯定的に解釈していると明らかにしたことがある。

非都市部では、地元で女性に対して安定した就業先が限られていることが原因で、女性が保育職という進路に水路付けられていくような印象があり、非都市部における女性のキャリア選択肢の少なさが顕在化しているようにも見受けられる。

しかし、本稿における協力者の語りからは、非都市部の若年女性が教育に携わる仕事に就きたいという思いや、小さい子どもと関わるのが得意だという適性を活かしたいという思いから、主体的に保育職というキャリアを選んでいる様子が明らかにされた。彼女たちの語りからは、地元でも堅実に働くことができる職業であることを意識して保育職を選んでいる様子がみられたが、その地元志向の強さの背景には、彼女たちが「地元」に対して積極的な意味づけをしていることが関係していた。具体的には、個々の子どもに目が届く保育環境として地元の保育施設を主体的に選ぶ様子や、地元の職場ならではの人間関係の良好さを高く評価する様子が確認された。

先行研究では、地方の女子には老後のケアについての期待があり、母娘の互助的関係を続

けていくために女子を地元に残す戦略がおそらく無意識のレベルでとられているという指摘（石川，2011：79）を踏まえると、非都市部の若年女性は進路選択時に制約を受け、地元志向を受容していることが想定される。だが、本稿における協力者は、必ずしも地元志向の進路を消極的に受け入れているわけではなく、むしろ地元志向の進路に意義を見出そうとしていた。以上を踏まえると、非都市部の若年女性の現状や課題を正確に理解するためには、彼女たちが主体性を発揮して地元を選択している姿にも注目する必要があるといえる。

本稿の限界として、第一に、非都市部の若年女性の移動歴が、進路選択時に受ける制約の内容にどのように関わるのかということは明らかにできていない。片山・牧野は、地域では様々な移動歴をもって若者が暮らしているため、移動に関することがらがそれぞれどのような価値観や行動形態、ネットワークに紐づき、またそれぞれの若者たちがどのように交錯ないしはすれ違っているのかを考慮することが重要だということを指摘した（片山・牧野，2018：22）。特に、居住する地域の社会関係に依存せざるをえない「ずっと地元」層は、同じ住所に住んでいても人間関係が閉じていて、生きる世界に広がりのない感覚を持っている場合が多いのではないかと指摘されている（轡田，2024：78）。これらのことから、「ずっと地元」層の若年女性と、本稿の協力者のように進学を経験した若年女性とでは、同じく最終的に地元で就職したとしても進路選択時に抱える課題が異なると想定される。

非都市部から高等教育機関に進学するには地元を出ることが前提となる。そのため、家族からケア役割の期待を受けることによって、高等教育機関への進学を選択肢から外す場合もあり得ることを踏まえると、非都市部で「ずっと地元」層の若年女性は、地元を出て進学をした若年女性と比較し、独自の制約を受ける傾向が強いのではないか。したがって、非都市部で生まれ育った若年女性が、進路選択時に受ける制約の内実を詳細に明らかにするためには、高卒で地元で就職した若年女性の経験を含めて議論を展開する必要があると考えられる。

第二に、非都市部の若年女性が「短大・専門学校」という高等教育機関をどのように意味づけているのかということは明らかにできていない。先行研究では、地方では男性ほど大学進学を希望し、女性ほど短大・専門学校進学を希望すること（上山，2024：208）のように、一般的に短大・専門学校は女性向けの進路として見なされる傾向があると指摘されてきた。

本稿における協力者の語りでは、短大は専門学校よりも四年制大学寄りの高等教育機関として評価されているようにうかがえる場合があった。例えば、協力者たちの語りの中で、学歴として専門学校よりも短大を高く評価し、短大を四年制大学の代替にしているようにも捉えられる場合がみられた。本稿では分析を深めることができなかったが、おそらく非都市部では「短大」に進学することに独自の意味が付与されている可能性が高いと思われる。

したがって、非都市部の若年女性の進路選択の実態について理解を深めるためには、非都市部から進学した若年女性にとって、短大・専門学校がそれぞれ学歴としてどのように評価されているのか、また、いかなる意識のもと進学を決めたのかという点に注目する必要があると考えられる。

注

- ¹ 本調査は、「北海道大学大学院教育学研究院における人間を対象とする研究倫理審査」の承認を得ている（受付番号23-16番，令和5年8月15日付）。

〈引用文献〉

- 阿部誠，2017，「第3章 地方圏の若者はどのようなキャリアを歩んでいるのか」石井まこと・宮本みち子・阿部誠編『地方に生きる若者たち—インタビューからみえてくる仕事・結婚・暮らしの未来』旬報社，pp.85-136.
- 石川由香里，2011，「第3章 進学に向けての地域格差とジェンダー格差—背景にあるケア役割への期待」石川由香里・杉原名穂子・喜多加実代・中西祐子編『格差社会を生きる家族—教育意識と地域・ジェンダー』有信堂，pp.61-80.
- 石黒格，2018，「青森県出身者の社会関係資本と地域間移動の関係」『教育社会学研究』102，pp.33-53.
- 岩脇千裕，2025，「1章 日本社会の構造的変化と専門学校卒の初期キャリア」片山悠樹編『就「社」社会で就「職」する若者たち—専門学校生の初期キャリア—』学文社，pp.16-37.
- 上山浩次郎，2024，「性別と所得から見た進路選択—北海道の高校2年生を対象に—」『北海道・札幌市子ども生活実態調査特集 子ども発達臨床研究』19，pp.197-210.
- 尾川満宏，2012，「地元労働市場における若者たちの大人への移行—社会化過程としての離転職経験—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部』61，pp.57-66.
- 片山悠樹・牧野智和，2018，「教育社会学における『地方の若者』」『教育社会学研究』102，pp.5-31.
- 上地香杜，2025，「8章 キャリア形成と地域移動—保育系と美容系における仕事と地域」片山悠樹編『就「社」社会で就「職」する若者たち—専門学校生の初期キャリア—』学文社，pp.160-178.
- 上地香杜・都島梨紗，2025，「9章 保育系/美容系専門学校卒業生の初期キャリア」片山悠樹編『就「社」社会で就「職」する若者たち—専門学校生の初期キャリア—』学文社，pp.179-208.
- 吉川徹，2001，『学歴社会のローカル・トラッカー地方からの大学進学』世界思想社.
- 響田竜蔵，2017，『地方暮らしの幸福と若者』勁草書房.
- 響田竜蔵，2024，「ポストアーバン化時代の地方暮らしと「移動する地域」」『家族社会学研究』36(1)，pp.73-88.
- 小林雅之，2009，『大学進学の世界—均等化政策の検証』東京大学出版会.
- 杉田真衣，2015，『高卒女性の12年 不安定な労働，ゆるやかなつながり』大月書店.
- 杉原名穂子，2011，「第8章 個人化する社会と親の教育期待」石川由香里・杉原名穂子・喜多加実代・中西祐子編『格差社会を生きる家族—教育意識と地域・ジェンダー』有信堂，pp.169-186.
- 都島梨紗・上地香杜・片山悠樹，2025，「4章 専門学校からの移行プロセス」片山悠樹編『就「社」社会で就「職」する若者たち—専門学校生の初期キャリア—』学文社，pp.68-93.
- 土田とも子，2009，「第8章 釜石の女性を取り巻く現状と課題」東大社研・玄田有史・中村尚史編『希望学3 希望をつなぐ—釜石からみた地域社会の未来』東京大学出版会，pp.237-274.
- 中澤高志，2017，「第4章 若者が地方公共セクターで働く意味」石井まこと・宮本みち子・阿部誠編『地方に生きる若者たち—インタビューからみえてくる仕事・結婚・暮らしの未来』旬報社，pp.137-175.
- 朴澤泰男，2024，「少子社会日本における高等教育へのアクセス—大学進学・選択行動の地域的差異から考える—」『名古屋高等教育研究』24，pp.223-242.
- 宮本みち子，2017，「第2章 若者の自立に向けて家族を問い直す」石井まこと・宮本みち子・阿部誠編『地方に生きる若者たち—インタビューからみえてくる仕事・結婚・暮らしの未来』旬報社，pp.57-83.
- 山田愛子，2025，「非都市部の子どもの進路選択に関する一考察：地域の制約と資源に着目して」『現代社会学研究』38，pp.19-37.

Career Paths of Female Adolescents in Non-Urban Japan: A Case Study of Nursery and Kindergarten Teachers

Aiko YAMADA

Key Words

youth study in non-urban areas, career paths, female adolescence, childcare workers, regional disparity

Abstract

This research examines female adolescents' career decision-making processes and experiences in non-urban Japan. Existing literature indicates that restrictive gender norms, such as the expectation of a sexual division of labor, often create significant challenges for young women's career development in these areas. While studies have explored general adolescent transitions, a clear gap remains in understanding the specific lived experiences and choices of female adolescents pursuing locally prevalent careers. This study addresses this gap by investigating the factors influencing the pathways into nursery and kindergarten teaching for young women who grew up in small towns (population < 10,000), aiming to clarify how their decisions are shaped by their environment and gender expectations.

Employing a qualitative case study design, this research utilized semi-structured interviews to gather in-depth data. Participants included two nursery school teachers and one kindergarten teacher from the target community, where childcare roles are common occupations for women. Participants were purposefully selected with assistance from a local high school teacher to ensure relevant perspectives. Interview data were analyzed using thematic analysis to identify recurring patterns and key themes related to career influences, decision-making, and experiences.

Key findings emerged regarding the influences on career choice and progression. First, limited exposure to diverse female career models significantly restricted perceived options; one participant cited her sisters' jobs as the primary reason for choosing nursery teaching, highlighting a lack of familiarity with alternatives. This suggests that localized, gendered occupational structures strongly shape aspirations. Second, kindergarten teaching was viewed as a high-status, skilled profession, attracting academically high-achieving female students, reflecting local social hierarchies that influence career desirability. Third, participants actively utilized local resources, particularly crucial familial support (financial and emotional), to manage the demands of childcare work and navigate their careers despite constraints. Working within familiar social networks fostered comfort, and smaller class sizes allowed for deeper engagement with children. These findings illustrate an interplay between structural limitations (gender norms, limited opportunities) and individual agency in leveraging available social capital within the non-urban context.

In conclusion, the career trajectories of female adolescents in this non-urban setting are shaped by geographical context, local opportunity structures, and pervasive gender expectations. However, individuals demonstrate agency by strategically leveraging local resources. Although the small sample size limits generalizability, the detailed accounts offer valuable insights into these dynamics. This research contributes to understanding the lived realities shaping young women's careers in non-urban Japan.

